新譯 水滸傳

佐藤春夫

新譯水滸傳（すゐこでん）

第四卷

佐藤春夫

中央公論社

新譯水滸傳（すいこでん）

昭和二十七年十二月十日　印刷
昭和二十七年十二月十五日　發行

第四巻　定價二五〇圓

譯者　佐藤春夫

發行者　栗本和夫
東京都千代田區丸之内二ノ二

印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田町

發行所　中央公論社
東京都千代田區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルディング五九二區
電話　和田倉一一二二番
振替口座　東京　三四番

目次

第四卷

第二十九回　施恩　重ねて孟州道に覇たり
武松　醉つて蔣門神を打倒す……七
第三十回　施恩　三たび死囚の牢にしのび
武松　飛雲浦を大いにさわがす……二四
第三十一回　張總督　鴛鴦樓に血潮をそそぎ
武行者　蜈蚣嶺へ夜道をたどる……三一
第三十二回　武行者　醉うては孔亮をなぐり
錦毛虎　義により宋江をゆるす……七八
第三十三回　宋江　夜、小鰲山(かさりとうろう)を見物し
花榮　大に清風楽を騒がす……二六
第三十四回　鎭三山　大に青州道をさわがし
霹靂火　夜あけに瓦礫場(がれあと)を行く……一四〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三十五回　石將軍　酒店に書をもたらし
小李廣　梁山に雁を射おとす……一六七
第三十六回　梁山泊に吳用　戴宗をすすめ
揭陽嶺に宋江　李俊にであふ……一九五
第三十七回　沒遮攔　及時雨を追ひ捕へんとし
船火兒　潯陽江を夜中にさわがす……二三〇
第三十八回　及時雨　神行太保に會ひ
黑旋風　浪裏白跳と鬪ふ……二四九
挿畫　浪裏白李鐵牛　口繪
快活林　面三
人肉　二三

口繪・挿畫・裝釘

小杉放庵

新譯水滸傳

第四卷

第二十九回　施恩　重ねて孟州道に覇たり
武松　醉つて蔣門神を打倒す

さて、施恩はその時、すすみ出て、

「あなたさん、まあ、お坐りなすつて。あけすけに詳しくぶちまけて申し上げますから。」

「若殿さま、どうかうじうじなさらないで、」と武松は、「掻いつまんだ要領をずけずけおつしやつてくださらぬか。」

施恩は語り出して云ふやう、

「わたくし弱年のころから、武術渡世の師匠がたにつきまして、少しはその方の心得ができ、孟州のこのあたりでは、わたくしにあだ名をつけて金眼彪と云つて居ります。當地にはこの東門外に、さかり場がございまして、土地の名を快活林と申し、山東や河北の方面からの旅商人たちが、みんな取引に集つて來ますので宿屋の大きいのが百軒あまり、ほかに、ばくち場や兩替屋だけでも二三十軒はございます。で、わたくしは從來、一つには腕の力、二つにはまた獄營内の命知らずな囚人ども八九十人をうしろ楯に、あちらで居酒屋の店をひらきながら、宿屋、ばくち場、兩替屋に悉く云ひつけまして、旅かせぎのあそびの女で、渡り歩くのが來たら、まづわたくしのところへあいさつによこ

させ、そのあとで稼がせるやうにしてゐたものです。また、あちらの處處方方からは、毎朝毎日つけとどけがあり、月末には銀子で二三百兩の收入になつてゐましたのが、この頃、當地の兵營には今度練兵指揮に張といふのが東路州から參りまして、一しよにもうひとり引つぱつて來たのが苗字を蔣、名まへは忠といふ奴でして、そ奴が身の丈は九尺にあまるので、世間では奴の事を蔣門神と呼んでゐますが、奴は仁王さまのやうに巨漢といふだけではなく、腕にもなかなかおぼえがあり、鎗や棒もつかへば拳も利き脚も働き、なかでも得意なのが相撲で、自分で大口をたたきほざくところによれば、泰嶽（泰山のこと。毎年一回の相撲興行の本場所。事は第七十四回に詳し）で三年間土つかず、天下已にかなふ者なしと、かうなのです。それが、こちらに參るなり、わたくしの繩張りを横取りしてしまひ、わたくしはさうはさせまいとて毆られ蹴られ、二月も寢たっきり。せんだって、あなたさんがお見えの時には、まだあたまを布片に包み、手を卷いてゐた程で、今もつて傷痕は消えてをりません。それで、本來ならば人を狩り出してなぐり込みにも行くべきところですが、それでは、あちらにはあいにくと練兵指揮の張の部下の正規兵がゐますし、萬一、それが騷ぎ出した日には兵營の連中と氣まづい事になつてしまひます。わたくしが無限の恨を呑みながら報いもせずにゐるのはつまり、そのせゐですが、あなたさんの立派な男としてのお噂は、ずっと前々から承つて居りましたところ、もし、わたくしのためにこの根深い口惜しさをお晴しくださいますやうならば、それこそ死んでも瞑目できるといふものです。尤もあなたさんはまだ長途のお疲れもご恢復なさらず、ご氣力も十分ではございますまいと存じますので、それで三月なり半年なり、ゆっくりしていただいた上、すっかり大丈夫と云ふところになられたならご相談と、實はそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の氣で居りましたのに、とんでも無い、あの田舎者めが口をすべらせましたばかりに、わたくしもかうしてすっかりお打明け申すのでございます。」

武松は聞いてからからと笑ひ出しながら、

「その蔣門神には、あたまは幾つ、腕が何本ございますか？」

「あたまは一つ、腕は二本、どうして餘計にございませうや。」

「あっしや、また、あたま三つ、腕は六本の那吒（もとインド神話より輸入し來つた荒がみさまにて、西遊記に活躍す）のやうな腕利きかと思つて、それだつたら、あっしも尻ごみしませうが、やっぱり、たかが一つあたまに二本腕、那吒みたいでないとすれやァ、いったい、そんなものが何ですかよ！」

「何ぶん、わたくしが、力も業も足りず、それで相手になれないだけです。」

「口幅ったく云ふのぢやありませんが、あっしや力まかせ、腕っぷしまかせ、いつも世の中の業つくばりの、えらさうな面したのをやっつけたいのが性分。おつしやるやうな次第でしたら、ぢや、いまごろ、こんなところでまごまごしては居られません。酒があるなら持つて行つて、途中でひつかけるだけのこと、さあ、お供してこれから押しかけ、虎同然に、そいつをやっつけてみませうや。ひょっと拳骨が利きすぎて、毆りころしたその時にや、なあに、あっしが命をなげ出して償つてやるだけでございます。」

「まあまあ、お坐りなすつて、父がお目にかかりまして、それからのこと、さうさう盲めっぽふにもできません。明日人に樣子をさぐらせにやつて、もし本人がゐるやうならば、明後日出掛けませう

し、また居なければ居ないで、別に工夫すると致しませう。やたらに行つて藪蛇になり、むかうに警戒をさせたのぢやつまりませんから。」

武松は焦立つて、

「若殿さま、それだから、してやられなすつたんです。男ってのは、さういふものぢやございますまい。行くなら直ぐ行きなさいまし。今日だ、明日だと、何をお待ちですか。ぐづぐづしてりや氣取られちまひまさ。」

武松をなだめ切れないで居る折から、牢城奉行その人が、屏風のうしろから立現はれて聲をかけた。

「あなたさん、わたくし、さきほどから、お話は承つてをりました。幸ひ今日お目にかかることができて、伜にとつては、さながら雲をはらつてお日さまを拜むやうなものでございます。奥ざしきでご一献さしあげたうございます、どうぞあちらへ。」

武松が奥へついて行くと、奉行は云ふ、

「さあ、どうぞ。」

「いや、わたくしは、」と武松、「囚人の身ですから、お奉行さまとご一しよには坐れません。」

「まあまあ、さうおつしやるな。伜は義人にお目にかかつて何よりのしあはせなのです。どうかご遠慮なく。」

武松も、御免とばかり、向ひあつて座についた。が、施恩だけはそこに突つ立つたままでゐるので、

「若殿さま、なぜ、さうしていらつしやいます?」

武松が聞くと、

「父がお相手申します。あなたさんは、どうかご氣隨に。」

「だつて、それぢや、あっしが困ります。」

そこで奉行は、

「ぢや、ああおつしやるんだし、ここには別人も居ないことではあり、」

と施恩を座につかせた。雇人たちは酒さかな、一切のご馳走を持ち出して來た。奉行は手づから、武松のために盞を取り、

「足下のそのやうな英雄ぶりに、誰か敬慕しない者がございませうか。伜が前に快活林で商ひごとをしてをりましたのは決して財や利をむさぼつての事ではございません、全くは孟州のこの土地に貫祿をつけ、豪俠な氣風を添へようとしてだつたのですのに、思ひもかけず、今度、蔣門神に、人の威勢、己の力を賴みとして、みすみす横取りされてしまひ、この恨この恥は、あなたさまででもない事には、たうてい雪ぐことはできません。どうか、伜めをお見捨てになりませぬなら、たっぷりとこのさかづき一つをお乾しなすつてくださいまし。伜には、あなたさまに四拜の禮をいたさせ、あなたさまを兄上としてうやまはせませう。」

武松はそれに答へて、

「あっしにや學問も何の取柄もございません。若殿さまにそんなにされましたのでは、飛んでも無い。罰があたつて、碌な目はみますまい。」

酒はその場でのみ乾された。施恩は四へん頭をさげた。武松もあわただしく禮を返して義兄弟となつたのである。武松がその日喜びのために泥醉したのを人々に扶けさせて座敷に寢かせて、その日のはなしはそれだけであつた。

夜が明けると施恩父子は相談をして、

「武松はゆうべ、あんなに醉つたので、からだに障つてゐるだらう。今日はとても出せないから、人を遣つてみさしたら相手がゐなかつたと、さうかこつけて、日を延ばし、そのうへの事にしよう。」

施恩はその日武松に會ひ、

「今日はまだ行けませんよ。人をやつてみてわかつたのですが、奴は家には居りませんので、明日ご飯をすましたあとで、行つていただきませう。」

「それや明日だつて構ひませんが、お蔭で今日一日またむかむかして居なけりやなりませんわい。」

と武松はさう云つてゐた。朝飯の後、茶がすむと、施恩は武松とともに獄營のあたりを一まはり散歩しあるいた。再び客間に歸つてくると、鎗の使ひ方をはなしたり、拳や棒をくらべてみたりしてゐるうち、午の時刻になると武松を住居の方へ迎へ、酒はほんの申しわけ、その代りには酒の肴や、飯の菜は數へ切れないほどふんだんに出し並べてもてなした。武松がほしかつたのは酒である。それだのに勸められたのは肴ばかりだつたので興ざめた氣持で晝飯も匆匆にかき込み、辭して客間に引きとると、やがて入り來つたのが例の二人の軍卒で、彼の沐浴を手傳つた。武松は聞いてみた、

「君たちのところの若殿さまは、なぜ今日はご馳走ばかりおれにすすめて酒の方はちょっぴりしか

くれなかつたのだらうか？」

「そいつァ」と軍卒は云つた。「ありていに申せば、今朝っかた、お奉行さまと若殿さまとのお談し合ひで、ほんとは今日お出かけなさるところを、ゆうべ都頭が深酒なすつたんで、二日酔もさめてはゐまい。自然また、せっかくの大事をおしくじりなすつちやいけないってんで、お酒の方はお控へになり、あす、都頭にお出かけ願はうとなすつてゐられるのでございます。」

「すると、何か。おれが酔つたなら、大事をしくじるだらうってのだな？」

「さうでがす。さういふご相談でごわした。」

武松はその夜、夜明けを待ちかねた様子で翌朝は早々と起きあがり、顔を洗ひ、口をすすぎ、頭には卍字型の頭巾をかぶり、身には土黄色の木棉の袗を着込んで、紅絹のしごきを腰にしめ、膝までつつむ脚絆をつけ、足に八ッ目のわらぢを穿き込むと、こんどはちひさな膏薬を乞ひもとめて、顔のおもての金印にぺったり貼りつけたものである。施恩もまたはやばやと出かけて來て、自宅の朝めしにさそつて行つた。それが終ると施恩は云つた——

「厩から馬を曳き出して乘つてまゐりませう。」

「あっしや足弱ぢやあるまいし、なんで馬に乘りますかよ！　あっしにはたった一つしか注文はございません。」

「どういふご注文でせうか？　仰言つていただけばみなそのとほりにいたしませう。」

「これからごいつしよに城に出ましたら『三なくば酒ばやしを行き過ぎず』ってことにお願ひした

いんです。」

「あなたさん、その『三なくば酒ばやしを行き過ぎず』とは、どういふことでせうか？　どうも、わたくしにははっきりいたしませんが。」

「ぢや、申しあげますがね」と、武松は笑ひつつ、「あなたさん、これから蔣門神をやっつけにお出かけになり、城を出はづれて行きましたなら、いつでも酒店の前にさしかかる度毎に、必ず、あっしに三杯だけ、そこで飲ましてくださいまし、さうして三杯がすまなけや、その店にかかってゐるさかばやしの前は行き過ぎないこと、これが詰り『三なくば酒ばやしを行き過ぎず』ってんでございますのさ。」

施恩は聞いて考へた。

「快活林は東門から、およそ十四五里あり、途中、思ひ浮べられる酒店だけでも十二三軒はあるでせう。しぜん、一軒毎に三杯づつ飲んだ日には、合せて三十五六杯飲んでから、やっと行き着ける勘定で、さう酔ひなすつたんぢや、どうにもなりますまい。」

武松は大いに笑ひだし、

「あなたはあっしが酔つちや腕がにぶるとお思ひのやうですが、實は、あっしや酔はないことにや駄目なんです。おなかに一分の酒がありや一分の力が出てきますし、五分の酒で五分の力、さらに十分飲みますと、さあいったい、どこからあんなに力が出てくるのか分りません。もしも酔つて大膽になれなかつたら、どうして景陽岡で、あの虎退治ができましたらう。これから向ふへまゐつた時には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com